



三國
傳來

善光寺如來繪詞傳

一

ハ 4

6207

1

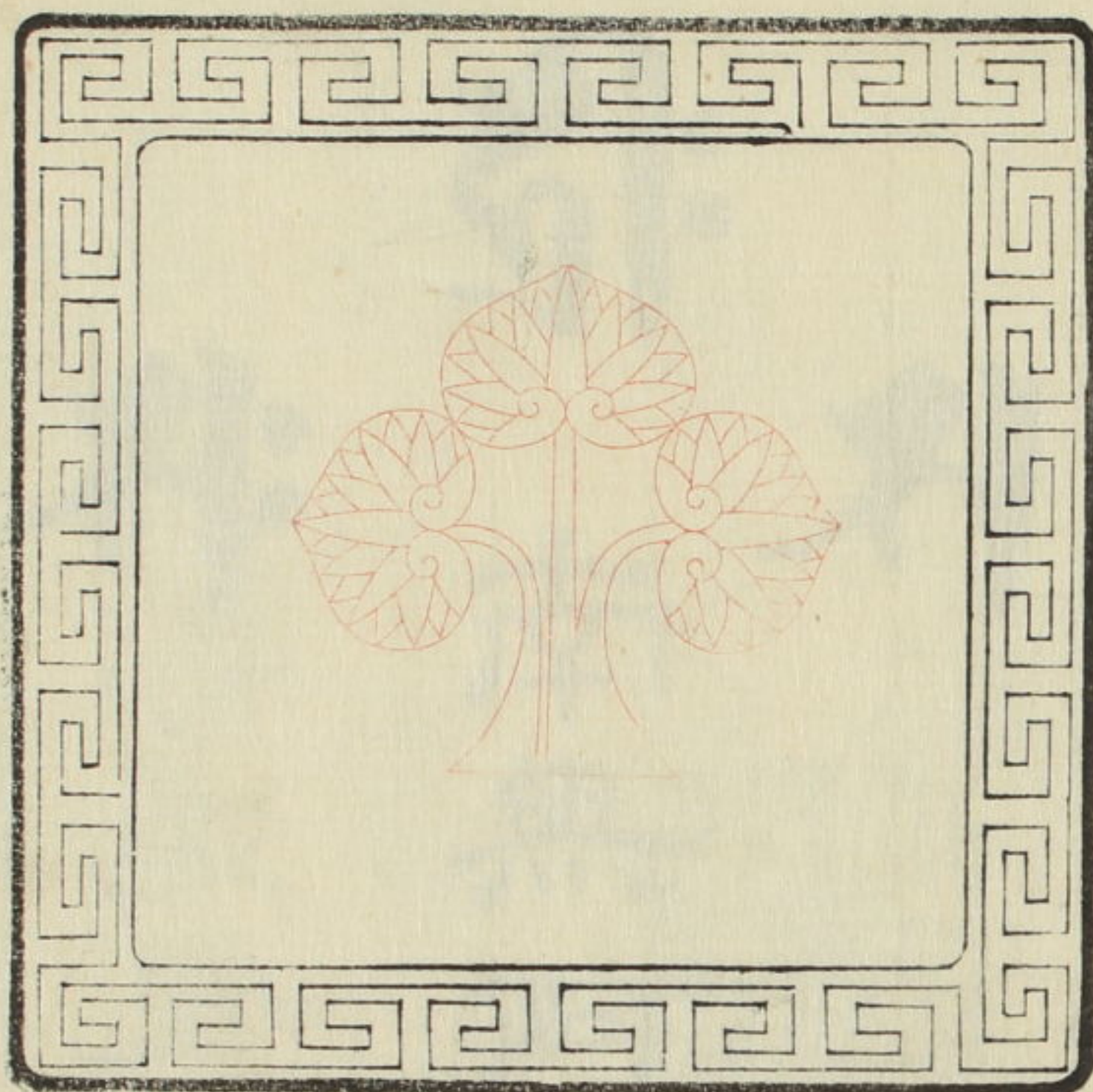


東叡山藏板

善光寺繪詞傳

自一至四為前編

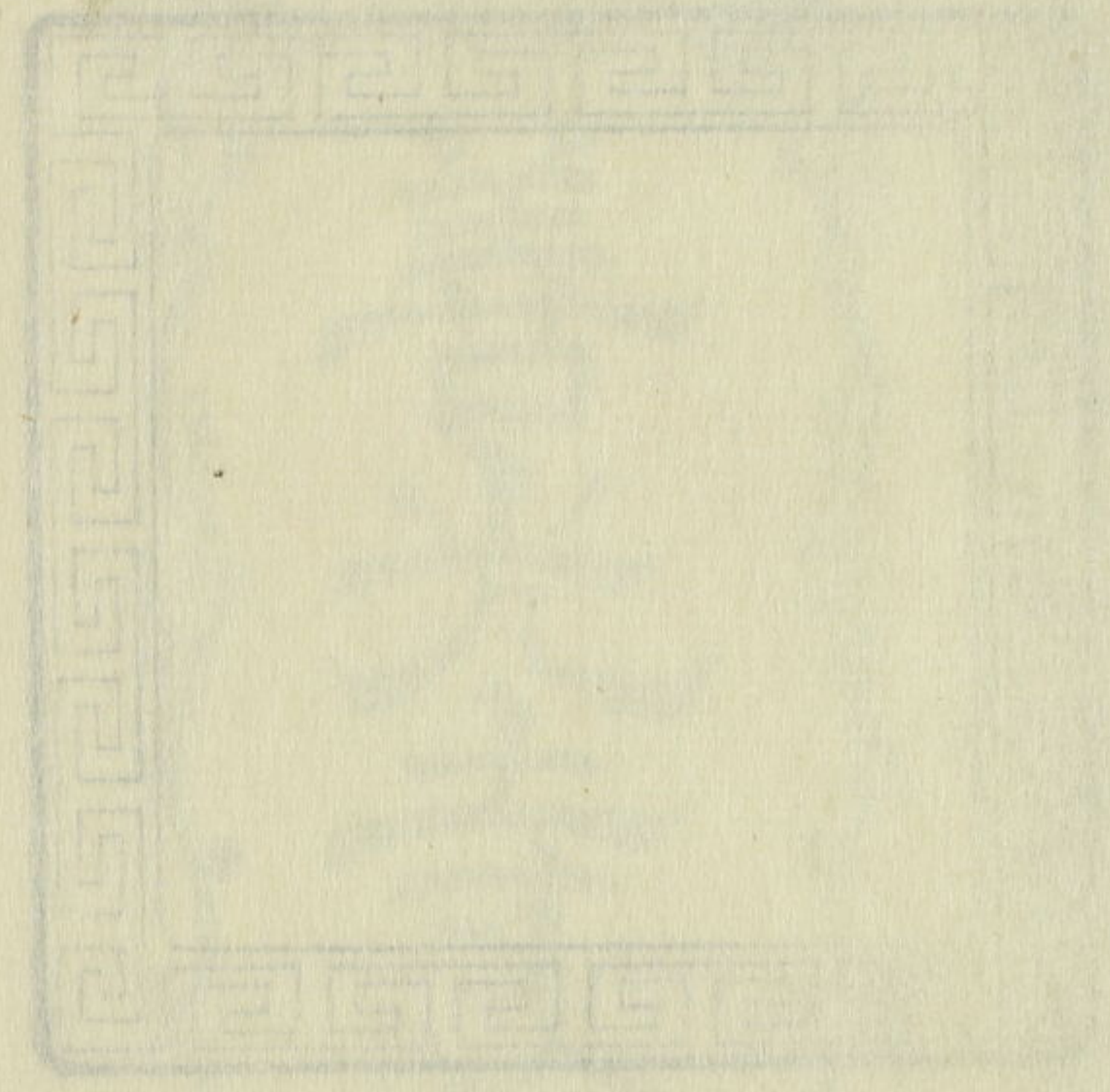
本字田川



非 南無阿彌陀佛

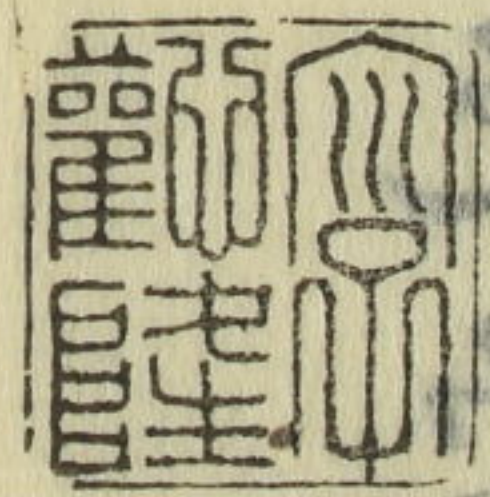
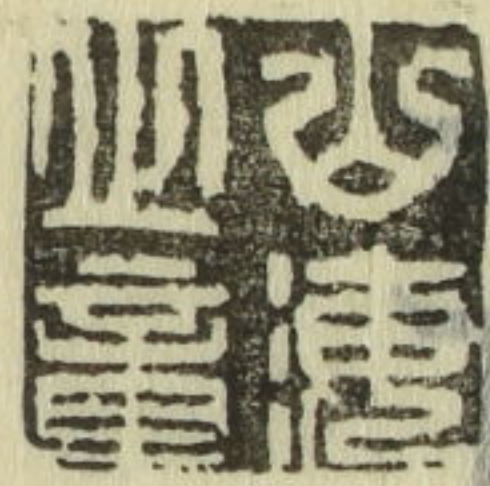


本經



信州善光寺別當

大勸進權增正山海謹書



善光寺此初傳序
當山緣記以深布
於多杜機中實
為說之緣計也
明者因之而思
之為實證鳴呼
三國其鐘

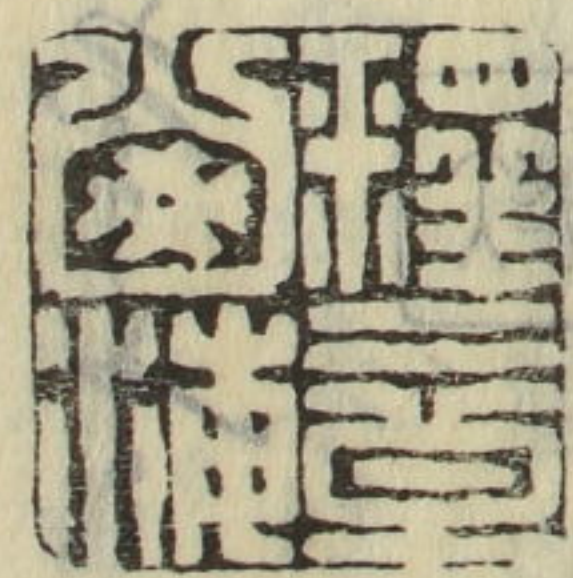
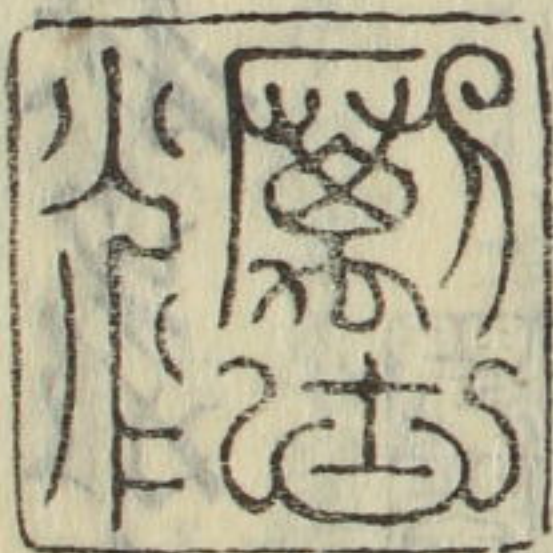
靈法之實來居於靈院
可勝彩女勢少松阪光
壽院第室僧者深痛之
精思古寺者政孫由得
晰之子社子者應隆實而
一之類曰實光之臨詞傳也

轉以布衣乃遠携來
曰序於寺者好以富山傳記
係你祕以僧者無情之置
因究其意男行正精詳以
從禮實以法布者名
未始丈人之地新氣能然

傳教之河流祕界朱河
 明主之任以國字加以國畫
 者善之之易清且不徒也
 唯之僅者用立之而得
 老安親切事之隨之
 之漢佛亦之因緣在焉

出法為禪為序云
 弘修了未月

住少善光寺安樂勸之現任
 大佛了院權僧正山海撰





あるせり其餘ある書籍のこの如来と載るもの
枚舉ふ違あつどもあつふいま世に流布する町版
縁起いたゞ世諺ふいつゝふることのをもとめて敢て
古正の書ふふに故ふ年代事實日本紀等の史傳に
齟齬するもの多端なりこれふもて諸人おほく
疑惑を起しその甚しきふいつゝりて三國傳來の
縁起は虚誕のごとくおほり譬は鄭聲の雅樂を
うたふ芳の苗と害するふ似たり予このことを
慨歎こと有年於此つひふ天保壬寅の夏ひそかに

發願せしより遠く四方ふもとめて秘鍵を探り以て古今
楷定の樞要を闡んとす予也頑魯たやよくその任に
たへどもといへども幸ふ先賢の諸鈔を勸説きて漸この
書を輯録し其のこの功德あまぬ法界に彌綸し
上ハ如來の慈恩を報謝し下ハ三有の衆生を開導せん
とるるふ本師如来と頂禮し説偈いしく

煥乎正傳

宣布十方

信謗讚毀

俱會蓮藏

告

弘化四年己のや未冬十月

般若臺法印元空敬白



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

凡例 十七則

- 此書編輯録する三國傳來の事蹟も、光中感見の傳記を祖述するも、其書體頗古文、とて、解りがたきゆゑ、古老のつゝと、そのめて、事々精々、故にひろく史傳の中に就て古正の説を採て、その闕たるを補ふ。
- 世尊月蓋の家小行をあたふこと、嘗て古正の傳記にいづる處なり、五種の鬼病は毘舍離國一般の流行、月蓋長者のかげと、は

全く國の爲ふして我女子一人拘執たることに
 あつてもほつても天竺の條下かくのごとくやるもの
 二三件ありといへども古よりそのまゝ人口に膾炙
 するところなれば敢て改竄せむと姑く繁を存せし
 世ふ善光寺縁起といふもの數篇あり中ふおいて
 沙門淨壽の撰ひたる靈應記は上古に遡りたる
 正統の書ゆゑ既ふ元禄年中梓行せりといへども
 その書義豊ふして文約なるゆゑあまねく愚俗
 かつゝいらず惜乎其題號さへもあつて人希なり

寛文年中ふ開版せし漢字四卷の傳記作者さへも
 どれどれ書めて杜撰尤多し其後元禄のころ
 上木する假字書五卷の縁起はかの四卷の傳記を
 據りて京都書肆の手ふ成たるものなれば
 謬妄尠く今この世ふ流布するところたゞこの
 假字書の一本のみなりかるがゆゑ識者いられを
 弾し童蒙いられがためか惑はるる大汎この如来を
 尊信するもの彼彈惑をなげきといふことなり
 これ予が今傳を編集するの基なり

○假字書十卷の太子傳なるものなりも寛文年中
新撰めて臆説となつておほい故に長崎一風の書
たる聖徳太子實録ふもこの書ハ太子の御為ふハ
却て仇となさるべきものなりといへりまうふかの
町版縁起ふ引用するところその太子傳より抄出たる
もの間ありて所謂百濟國の後妃宮女捨身往生の
妄説更ふ諸人の嘲とまねくもこれまうて如來の
御為ふ仇となさるべきの歟妄説義と害と豈恐れ
ざるべけんや

○善光寺如來と本師如來と稱するハ日本佛法の
最初なるゆゑなり扶桑略記ふいそく百濟國より
阿彌陀の三尊とありたまひて此邦の諸人肇て
佛法あることをあらり仍て世の人この如來と號て本師
如來といひいと云ふまうるとまハ本師の稱號その
来こと尚矣
○密教の習傳する楊枝淨水の本尊なるびふ法隆寺
碼頭石の善光寺如來いその御すがくおほい殊異
まうまう天王寺間浮檀金の彌陀尊法隆寺

黄金佛の三尊野州高田山の一鉢分身等も信州御本佛の御影に對映さればあめく大同小異あり

第六の巻のりへる

○

聖德太子善光寺如来と往復の御書は今現に

法隆寺つゞつて實の宇宙第一の寶章なりども

太子御在世より勅封をつけられたる苟も人の

あつてもものふあつてもあつても了慧の黒谷語燈録

圓光大師の勅修傳天台舜昌の述懷抄天王寺年

中法事記太子傳通要存覺報恩記塵添埃囊

上古も時々年
號ありあつても
つゞつてあつても
紀ふも載らるる
大鏡神皇正統紀
等文武帝の大
寶と年号の始と
なり

○

鈔等おもひて二首の偈文といひつゝへたり於中
勅修傳ふに命長七年といひ埃囊鈔に法興元年
辛巳といひり命長ハ舒明帝の年號つて太子薨
御二十七年の後なり辛巳ハ太子薨御の歳なりども
兩説とも信用あつて況やいまいひつゝみる
偈文ハその眞偽をあらも故ふらふもあらう

諸宗の祖師せいの知識善光寺ふあめををらび
たまひぬはるそが中ハ慈覺大師ハ善光寺に念
佛堂を建て不斷念佛を聞闢たまひ弘法大師ハ

善光寺の額をかきて奉納しなほ書寫山の性空
上人毎朝の法華讀誦と勸發とをまゝ圓光
大師ハ善光寺參詣の日御自身の御たけ小等
木像と刻て如來前ニ納置常隨給仕のちもひと
為たまひ親鸞聖人ハ百日叅籠のとき朝日山
の松とまりて供へたまふいふもなほその
先蹤をなほひて本堂の大華瓶よりうかづ
朝日山の松ともちひろる世よまんらん松といふ
これなり

今ハ大寶元年淡
海公の撰なり是
と大寶令しつ
平開のことハその
公式今ハ小のち
天長十年夏野公
小野篁等令義
解と撰と

○我 朝開闢より以来
皇統連綿たればかの唐土の諸史の前代異姓の天子
と記する書例と大凡同じかゝるに因てこの書
先帝 皇后 太子ハ闕字をもちひ
皇祖太神ハ提頭小 平出の
今上皇帝ハ擡頭小と跳出とをもちひる小平出闕字ハ
令かゝる義解小もなることなれども上表等
の外かほくハ此式なりされどもこの書ハ三代實
錄の書舛小擬して諸尊號 詔勅等の字の上ハ

慶安の王代一覽
かみひ近世の群書
一覽水鏡の撰
者中山内大臣
忠親公の撰
今鏡等の後か
りて大鏡の前
記せしもの故考
ア

本朝書籍目録
扶桑略記三十卷
阿闍梨皇圓の抄
と云

伊勢共記北
島親房卿の著書
四部あり元々集
扶桑略記神皇正
統紀原抄と云

一字を空

○此書は拔萃する水鏡神皇正統紀ハ 皇國ことバ
のこのむれば本書のまゝと寫し出さ日本紀扶桑
略記編年集成帝王編年紀等ハ漢文なるゆゑ人の
看やとかんことをかみひ和解とて引用と文のまゝハ
異なりといへども意いつもたがふことなりと大鏡
今鏡世繼彌世繼増鏡などハ水鏡の續篇なり次
を追ふ書つづけられたるものにてあがりたる世の
ことなれば此傳の所用ありと

○扶桑略記三十卷その撰者とあるはハ叡山
功德院肥後の阿闍梨皇圓の作ともいひ或は北畠
准后親房卿の撰ともいふこれ無稽の説なり
いませハ扶桑略記の殘篇と稱するもの纔ハ七卷を
存し 光孝天皇の元慶八年より 後朱雀院の
寛徳二年まで十二代のうちも缺本多くして
次第あらず又近世上木の官板扶桑略記ハ第二卷
神功皇后の紀よりありて第三十卷 堀川院の寛治
八年までいふたれども間缺本ありて都合十五冊

と存するものゝその大尾堀川院と今上皇帝と
とるされたる寛治八年の勅撰といひたり然
るゝハ皇圓も未生以前めて親房卿より二百四十
餘年の昔なり又尾崎春藏雅嘉の云々る本ハ
醍醐天皇の昌泰元年より後鳥羽院の建久三
年まで十四卷ありて巻の末ハ如来滅後の
年數と記せりと群書一覽よりいへり今井似閑
が萬葉緯ハ卷末ハ如来滅後とて書寫され
皇圓の作るころ歟といへるも一隅の論なり凡扶桑

殘篇七卷のうち
如来滅後の文が
本三卷ありこれ
日本紀略の雜り
たるなり實ハ
殘篇五卷なり

略記ハいづれの本ハ如来滅後の文ありて間ハ唐土の
王代ハありせたる處もあり況や皇圓ハ嘉應元年の
遷化なれば建久二年までの書ハ死後二十三年と
とるゝとて理なり平維章和學解ハ扶桑略記二
とよりありし書たるハこの二本といへるや孰も
最初の卷あへば上奏等の文もあるべし其卷と
缺たるゆゑ撰者の名を失はれども一部の始終
朝政ハわかりたれば勅撰すること必せり爰ハ又
丹州龜山侯の史徴ハ抄記せられたる扶桑略記

歴代編年集成
 六卷 聖武天皇
 の神龜元年より
 順徳院の承久三
 年までの撰者
 あれど
 帝王編年紀三十
 七卷 神代より
 後伏見院の正安
 三年までの撰
 者あれど

あり大寮官版の本とかなり今予が此書小引とて
 七巻の殘篇と十五巻の官版の史徴と校讎して

たゞその要を撮の

○この書は編年集成と載といへども予が見たる本は
 聖武天皇より以前の巻を關するゆゑ善光寺如
 來の八幡大菩薩の御ことゝ龜山侯の史徴
 といふれたる編年集成と再寫して典據とせ
 ○帝王編年紀の諸經翻譯の時代とあるゝ又如來
 滅後の年數小引ありとせたる文もありとて以後人

推て斯書と僧の作といへりあるれども先是編年集
 成も諸經の翻譯と如來の滅後とを記せしること
 彼と同しとて神皇正統紀日本紀纂疏の俱舎論
 天親菩薩と引て 神代とあるゝ水鏡等にも天竺の

あつせたる文若干あり大汎日本紀續日本紀日本
 後紀續日本後紀文德實錄三代實錄等の六史小も
 佛事を擧ぐるもの太多何ぞひとり帝王編
 年紀のと僧の作と局とを還て扶桑略記の
 ごとくハ如來滅後の文ありておほくハ唐土の王代と

三國の時代と
つゝ如来滅後
の年數の如く
天竺の如く
べきことなし

會通の如く
言開の如く
易會觀會通
行其典礼

いんぞ編年集成と帝王編年紀の如く如来
滅後の年數の如く唐土の王代と併記せり僧の
撰述ふあゝるること應知

○近世の儒者みづゝ臆説と書して聖徳太子に
無實の難を負せたるもの多し予はつゝ
存非一章と著して粗これを會通せしむるも
其書庫底に秘襲していま世にひろくせむ
こと安政きの卯の夕かゞけたるも斯傳と
東叡王府の御藏版に加へさせたまひ今法久住乃

時より多年の志願を満了し畢ぬ因てか
存非も此傳の附録として共々不朽と冀ふの
されども其書片假字にして書かれば愚夫愚婦は益
なり故に別帙として懇求人あゝるべし

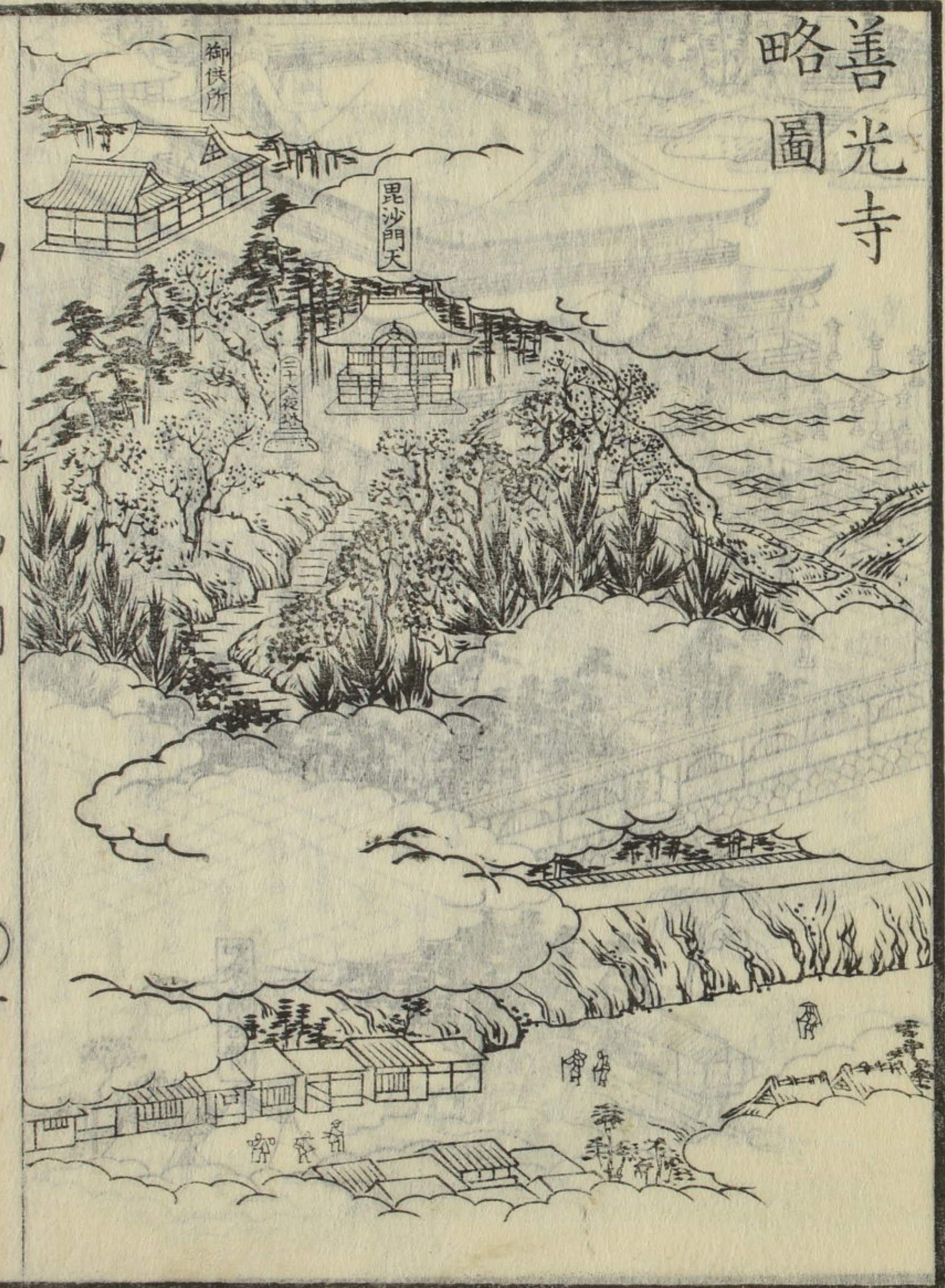
○斯書全部七冊のうち一より四はつゝと前編
より五より附録といふと後編といふハ弘通に
便せんが為なり就中前編倉卒に鈔寫し註解
精々も見ん人諒察焉

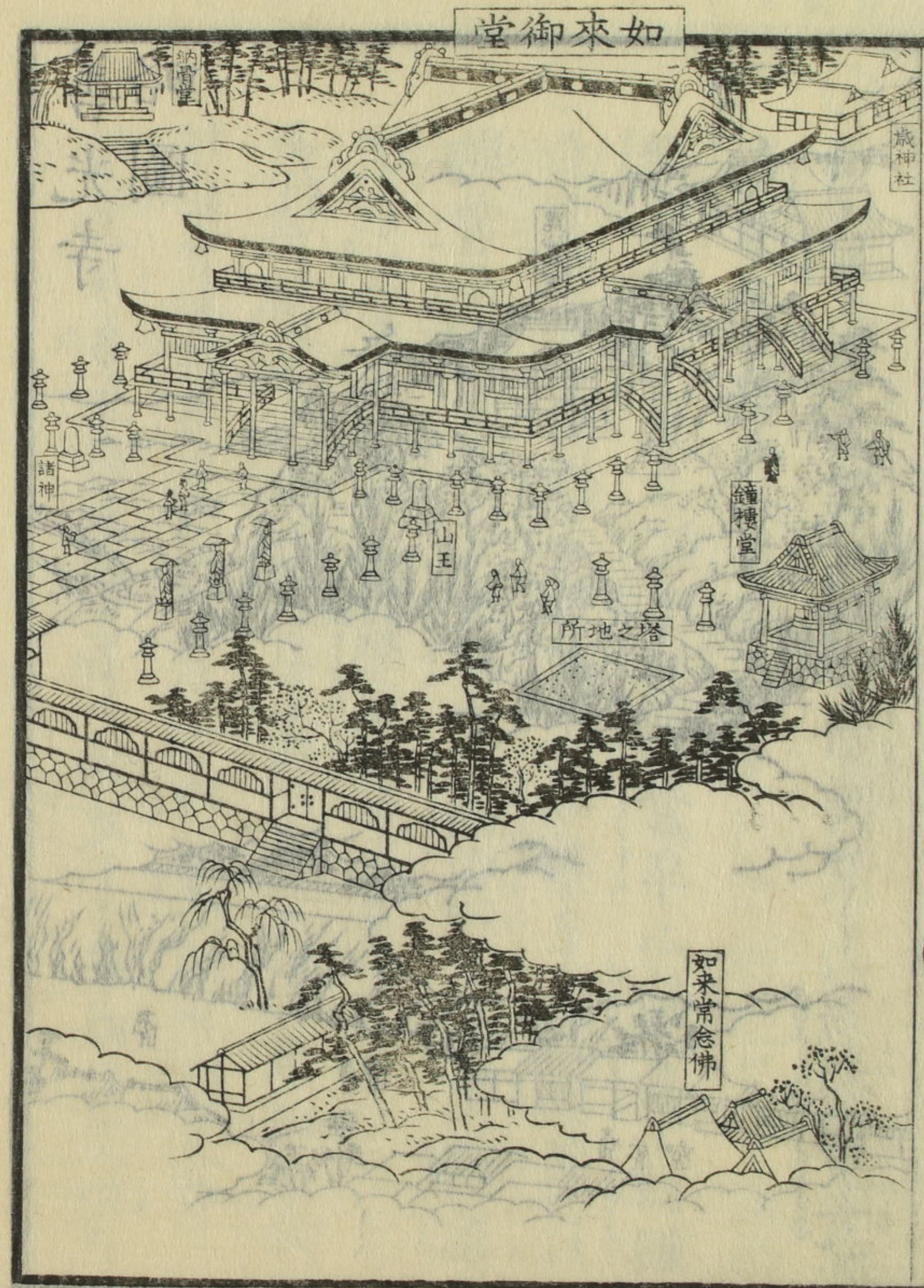
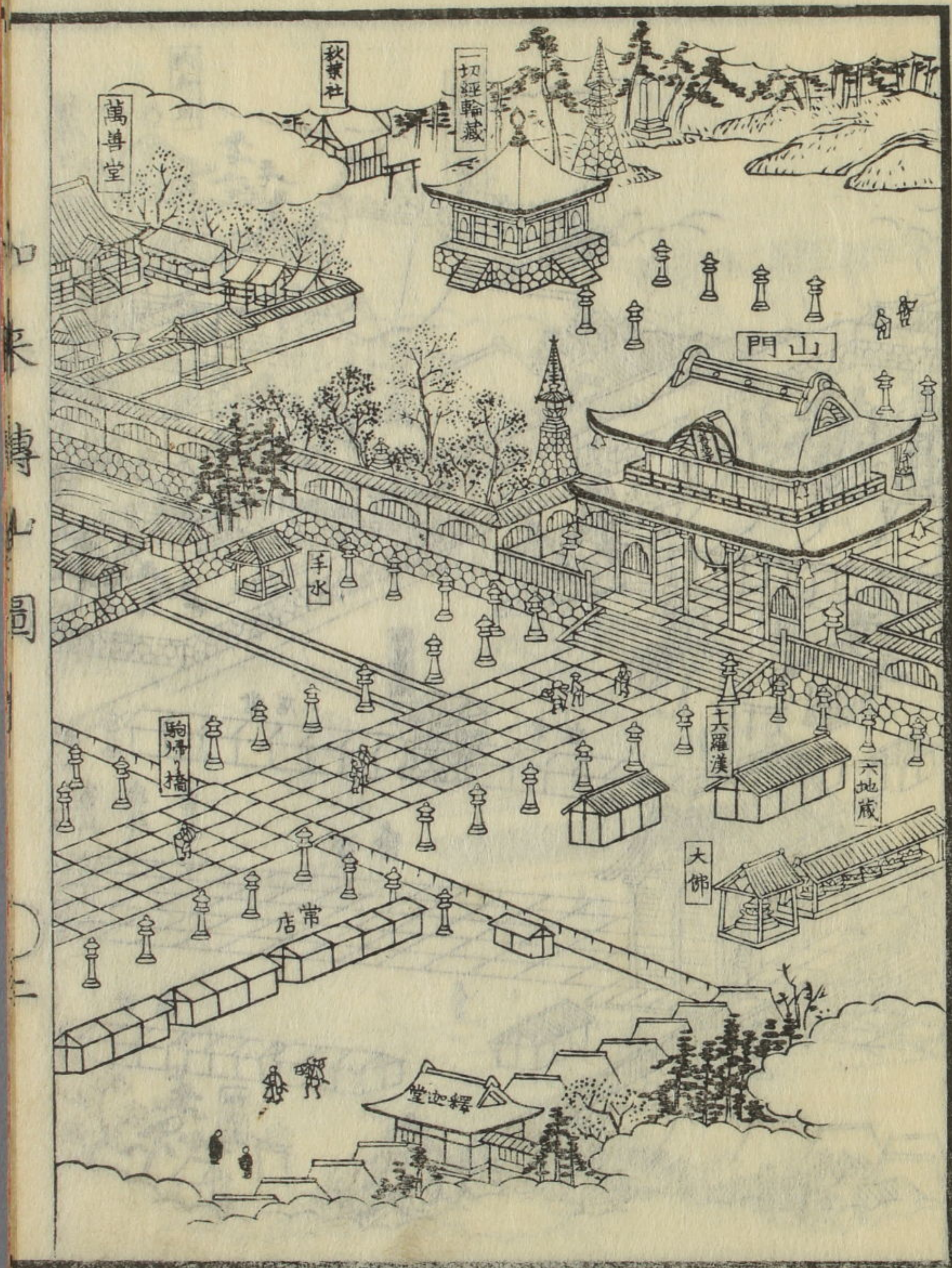
○この書ことさふ俚諺をもちひあるひ字音ふ

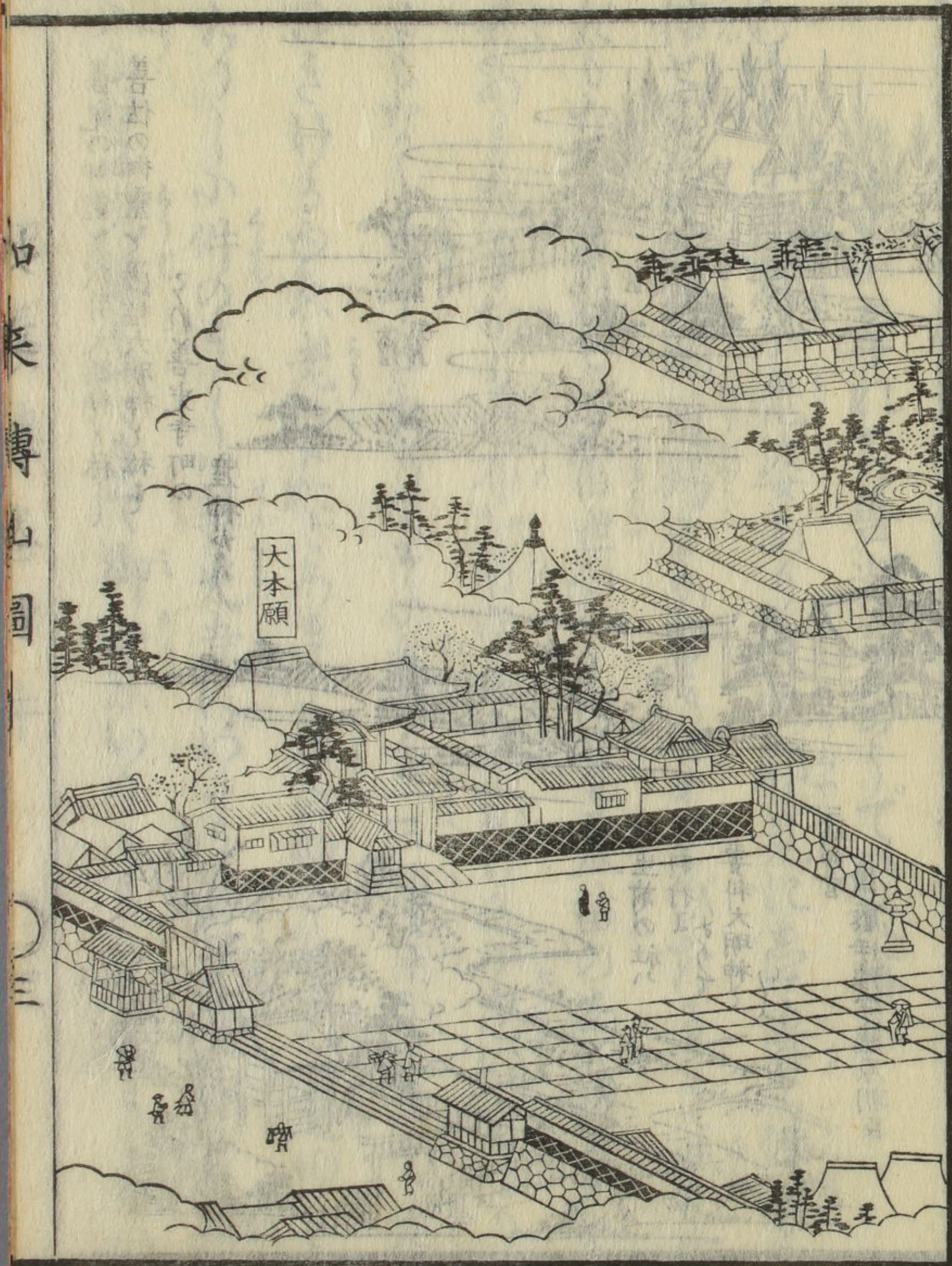
○かゝるべ義譯そのこけともて傍訓うなづけなり愚昧ぐまいの兒女こどもと
曉さささんぐちめなり

○其書全時十冊のてなこも四つてなり前
の書も其書は外宅より書たけり愚昧大愚昧
の非なり地軒の相殺なり共々不昧と其人の
心より至るの志願なる愚昧一畢の因なり

善光寺
略圖

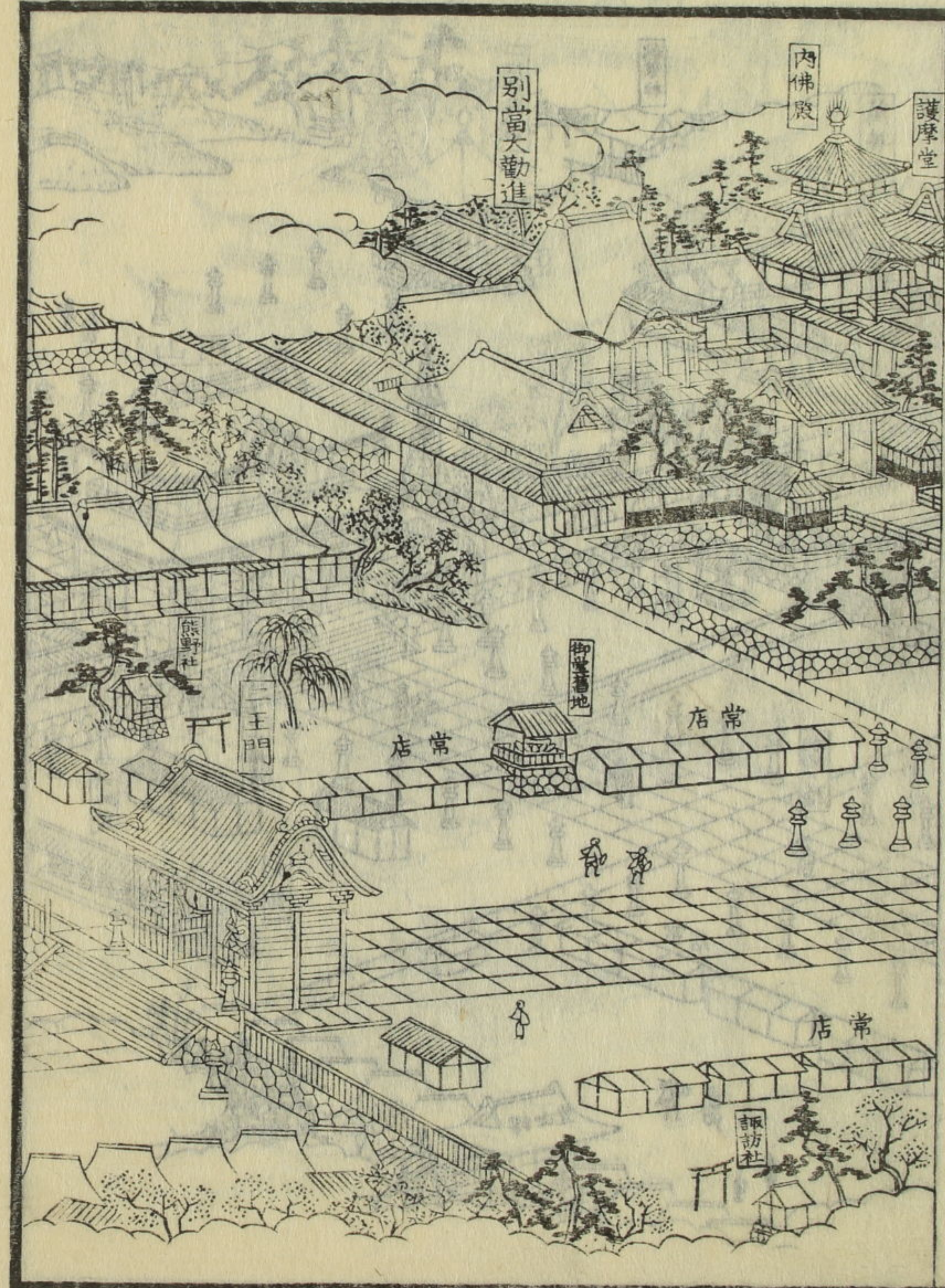






平家實正

森田繪圖



善光の御靈と武井大明神と稱し
善佐の御靈と湯桶大明神と稱も

これ善光寺町の
産神なり



平安書 森田將監易信

牛小牽れて善光寺まうての故事

むうちひさき小縣郡小老婆あり天性邪見いんげんにて嘗て佛法を
信ぜどいんげん況や佛閣道場いんげんはあゆいんげんことをとびたること夢に
だもないんげんうれども宿世いんげんいなる靈苗いんげんのありたるや
或あいんげんた手いんげんかりの布いんげんと日いんげんさうしいんげんちける小忽いんげんいづくいんげんり
ともないんげん大牛いんげんさちりてその布いんげんと二三いんげん匹角いんげんふまいんげんて走
ゆきけるゆゑ老婆いんげんたいんげんるきて牛のゆくかいんげんと追いんげんゆいんげんて
ちりいんげん小件いんげんのういんげんハ善光寺にいんげんいいんげんり如来堂いんげんにぞ驅いんげん
入いんげんける老婆もついんげんきて御堂いんげんふいんげんりいんげんるふいんげんやういんげんハ

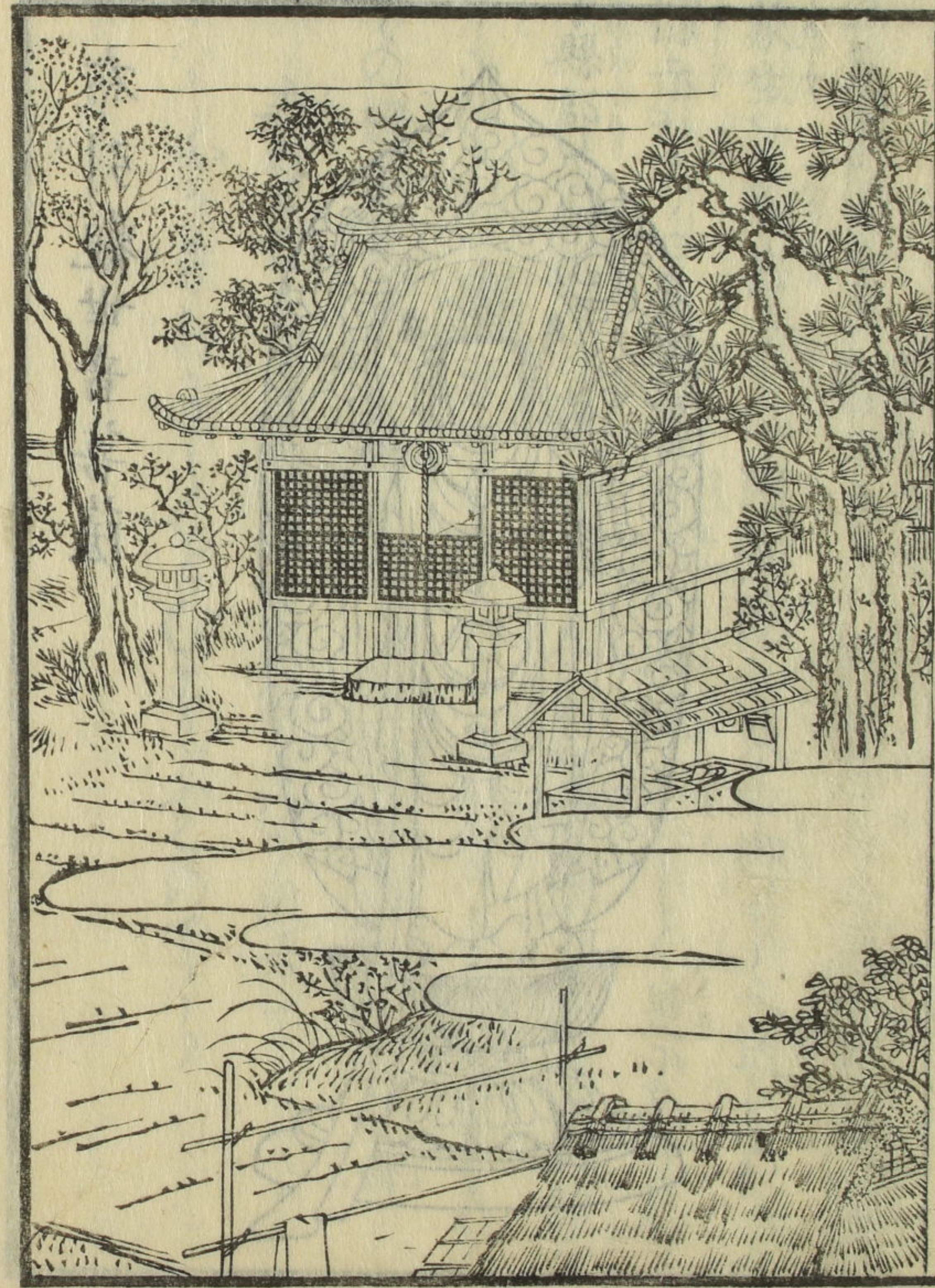
いづくへうゆきたりけん其ゆくへとも見うゝなひたれば
老婆もいま詮うゝなりその夜ハ善光寺ふこもりて終日の
疲をやもあ明をももて出たちゝぐきのふた布をとり
もどさんとのともひて我身のことハ忘たりゝふ今日ハ布をも
うゝなひて甲斐なくかへることなれば道のほどもと遠く
おぼに彼方此方ふやもひてそのかへるさふ小縣郡なる
觀音堂のほとりと過ゆくころ頻ふねむりを催しければ
堂のまどとゝふ腰うちわけてうたねあけるふ昨日の
うゝかの布と頸ふまきて現たりこの堂のうちふありと

見て夢さめたれば老婆とりあへど堂内ふ入るふ牛
ふいあゝで本尊觀世音菩薩の御首ふ布をうけて居
たまひたれば流石の老婆も大いねどろき諸はきのふ牛と
みゝいまことの牛ふいあゝで觀世音菩薩の大慈
大悲ふれを善光寺ふこもりて御方便ふて
ありけるふやとありがと骨髄ふ徹り立地ふ日來の
邪見とひるぐへ専修念佛の行者とハなりふける
瑜伽念珠經の中金剛薩陞菩薩數珠の功德と説
たまへる偈文ふ繩線貫串表觀音母珠以表無量壽と

のたまひたるハ觀世音菩薩の慈悲の絲いと小百八煩惱の
衆生と繫つなぎ止とどて本師阿彌陀如來の御もとへ送おくらせなふ
標示ひやうじなりいま老婆發心の因縁も正ただしく是これふあされり
小縣郡小布引の觀音として今もなほまゝまぜり世の諺ことわざふ
牛うしひうれて善光寺まゐりと古くよりいふ事なれど
その譯わけとある人の稀いとまれなるゆゑ因よふふとあると云
去いをさくらふとすれ絲いとひうれ来て
ふうきらふとすれとふうきらふとすれ

布引觀世音菩薩



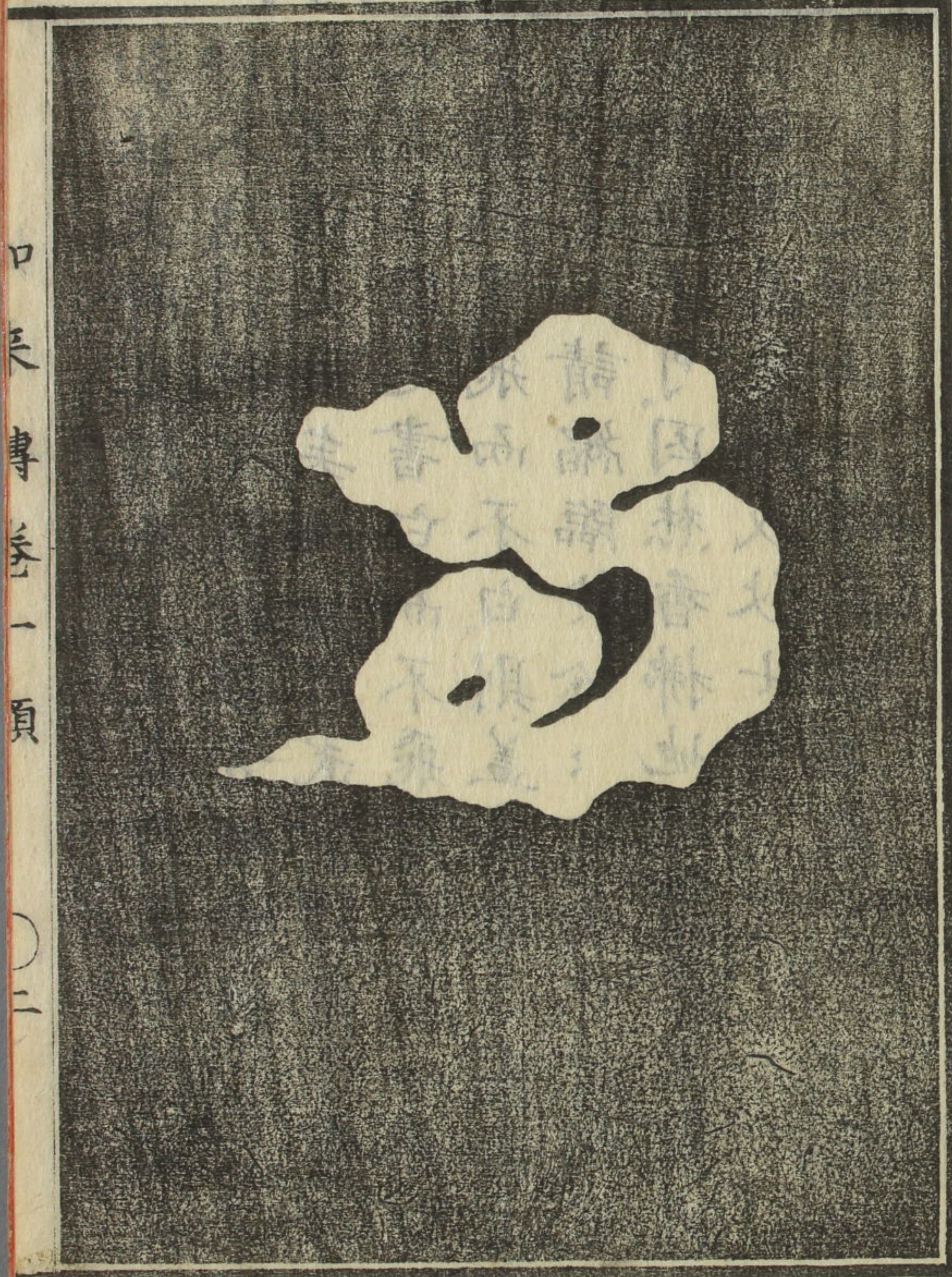


弘法大師



如來傳卷一客

額面縮寫



口來傳卷一頁

〇二

寫

皇

贈

面

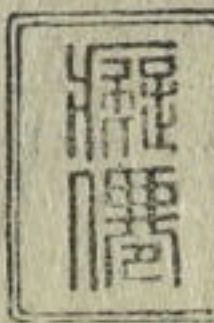
部

本字田川

弘法大師真蹟。本山文庫所藏也。傳曰。大
師入唐。得授筆說於韓方明。由此
皇朝書法大廣矣。勝按梁武帝謂蕭子雲曰。
頃見王獻之書。白而不白。卿書飛而不白。
今觀此書。飛而不白。則蓋法蕭子雲者。與。
萬空上人請縮臨於余。余曰。凡手汗聖豈
敢。固辭不可。因焚香拂地。恐懼舉筆。聊存
形似耳。嘉永庫戌秋七月

定額山

僧癡僊勝書



Handwritten notes at the bottom of the left page.

